

特集 「国語の力」を考える

—「話すこと・聞くこと」への挑戦—

前号では「国語の力」を「読むこと」から考えてみました。今回は「話すこと・聞くこと」を中心に考えていきたいと思います。新学習指導要領では「伝え合う力」を高めることが大きな目標となり、その中で「話すこと・聞くこと」への期待は大きく、時数は全体の1/10から2/10程度とはつきり定められました。一方、中学校の現場では、ディベートやパネルディスカッションという言葉だけが人歩きしたり、人前で話すことを恥ずかしがる時期の指導の難しさが指摘されたりしています。

「話すこと・聞くこと」では、何を基本に考えればいでしょうか。先生方はどんな工夫をしているのでしょうか。ともに考えていきたいと思います。

「聞く」はむずかしい

コラムニスト

天野 祐吉
あまの ゆうきち

小さな事件に巻き込まれた友人の件で、ある新聞社から電話で意見を求められたことがある。

で、思わずぼくが「あいつもバカだなア」と、彼は人がいいからそんな事件に巻き込まれたんだろうということを話したら、翌日の新聞に「天野祐吉氏談・彼は馬鹿である」と出ていたのにはびっくりした。

たしかにぼくは「あいつもバカだなア」と言った。が、その言い方というか、声の調子をちゃんと聞いていたら、そこには人のいい彼に対する同情のひびきがあって、「彼は馬鹿である」とは決してならないんじゃないかと、ぼくは思う。

第一、ぼくは「バカ」と言ったのであって、「馬鹿」とは言っていない。そんな簡単な区別もつかない人が、新聞社の記者をやっているということに、そのときぼくは、腹が立つよりも、あきれてしまった。で、思わず新聞紙に向かって「馬鹿……！」とつぶやいてしまった。

「聞く」はむずかしい

「聞く」というのは、ぼくにとっては、何よりもまず、そういうことである。「バカ」と「馬鹿」は、「ビョーキ」と「病気」は、「スキ」と「好き」は、明らかに音が違うのだ。「スキ」は「好き」ほど好きじゃないのである。「話す」についてもまったく同じことなのだが、とりあえず、「スキ」と「好き」を聞き分けられない人は、言い分けることもできないから、話を「聞く」に限定してもいいだろう。

もつとも、「聞く」能力がないのは、例の新聞記者だけではない。「聞く」とは相手の「気」がこっちへ「来る」こと、つまり「気来」ということだと言ったのは、たしか多田道太郎さんだが、そんなふうになんと聞く能力を持った人は、かなり減ってきているように思う。

それはどうしてか。理由は簡単で、言葉がどんどん音を失ってきたからである。「何が言われたか」ばかりを大切にして、それが「どう言われたか」に気をつかわない悪い風習が蔓延したからである。だいたい、言葉のニュアンスなんかは二の次だ、大切なのは物事を正確かつ簡潔に伝えることだ、というコミュニケーションの効率第一主義が、こういう事態を生み出したのだと、ぼくは思っている。

琵琶法師の語る正調の「平家物語」を聞いたことがある。

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

という冒頭の部分だけで、なんとそれは三分もかかっていた。

朗読し、意味を解釈するだけなら一〇秒ですむ。

が、何もない空間に「平家」の壮大な舞台

装置を浮かび上がらせるためには、それ

だけの時間をかけ、音の呪力じゆりきをフルに

活用することが必要なのである。

学校で、「平家」を教えるときに

は、ぜひ琵琶法師にきてもらい、

実演をしてみようといひ。で、そ

れを聞きながら、「聞く」能力を

みんなで磨いてほしいと思う。

